

公衆衛生看護婦 1890—1930

——ナース・カバンの看護婦たち Part (1)

杉 山 恵 子

はじめに

1901年、ヘンリー・ストリート訪問看護婦サービスに所属するメアリー・M・ブラウンは、発刊もない『アメリカ看護学雑誌』に看護カバンの中身を誇らしげに紹介している。

ビン入り3オンスのアルコール、同じく5オンスのリステリン、ウイスキー、グリセリン石鹸、95%の炭酸。ねじつき広口ビン入りホウ酸、おなじくカスカラ錠、陶器入り2オンスホウ酸軟膏。おなじく1オンス10%のイヒチオール軟膏。…6オンス用白いエナメル・ボール、固形石鹸、つめブラシ、タオル、肉屋のような、しかし軽いモスリンのエプロン、漏斗、へら、鉛筆…口腔用と直腸用の体温計2本、はさみ、ピンセット…⁽¹⁾

これらは、長さ12インチ、幅5.5インチ、茶色の皮製でまちの部分は布、丈夫な皮ひもと調節可能なバックルのついたカバンにいれられ、看護婦の名札がつけられていた。看護婦たちは朝八時の仕事開始とともに、戸棚からそれぞれのカバンを持ち出すのであった。

巡回看護婦、訪問看護婦、公衆衛生看護婦とめまぐるしく呼び名をかえたかれらの歴史は、看護婦の歴史の中でも特異な位置を占めている。看護婦の専門職化が病院の成長と拡大とともに語られるのに比べて、公衆衛生を担っ

たこれらの看護婦は、病院や診療所、医師、そして保健局から独立して独自の活動領域を求めた。「家庭看護」を最優先とし、患者の社会的背景までも視野にいたした看護を掲げ、社会や病院が取りこぼした人々に手をさしのべようと奔走した。医師にも匹敵する尊敬をもってむかえられた彼女たちの独立と移動のトレードマークが看護カバンだった。レースのついた白い看護帽は、彼女たちにとって医師への従属の印でしかなかった。病院の外に自由にでた看護婦たちは、「市民の健康」あるいは「国民の健康」という発想を持つにいたった。本論は訪問看護婦サービスというきわめてアメリカ的展開をした看護サービスを20世紀初頭のアメリカ社会を写し出す鏡と捉え、その展開の意味を考えるものである⁽²⁾。

ヘンリー・ストリート訪問看護サービス

公衆衛生看護婦の前身であった訪問看護婦の拡大において中心的役割を果たしたのは1893年ニューヨークのロアー・イーストサイド地区で始まったヘンリー・ストリート訪問看護婦サービスである。それまでも看護婦を患者宅に送るサービスは1877年にニューヨーク市伝道団の婦人部が、1881年にマサチューセッツ、ボストンで看護教育協会がころみている。イギリスでは、担当地区を巡る巡回看護婦としてすでに定着していたのを見習ったのである⁽³⁾。しかし、組織力、リーダーシップで全国展開の要となったのが、リリアン・D・ウォルドとメアリー・ブリュースターによって始まった、ヘンリー・ストリート訪問看護サービスだった。ウォルドはのちに社会活動家として多方面の活躍をするため、看護婦であったことが忘れられがちである。しかし、その活動の根底には看護婦であることが重要な位置をしめている⁽⁴⁾。

その発端は劇的である。1891年に、看護学校を卒業したばかりのウォルドは日曜学校の看護教育者募集に応募した。授業を終えて、請われるままに生徒の家庭を訪ね、そこで、今まで目にしたことのない光景に出会う。自分の思いを語ることが極端に少なかったウォルドだったが、後にその体験を次のように書いた。

子どもの家庭は犯罪者の集まりでも、悪人の集まりでもありませんでした…二部屋に家族七人が下宿人らとひしめいて暮らしていました…。その子の父親は障害を抱え…母親は二週間続いた出血のため、血のしみた寢床に横たわっていました。…処置を終えて帰り際に彼らは私の手にキスをしたのです。もしかれらが不道徳極まりない一家であったなら、私自身もその一員である、こうした悲惨を野放しにする社会を擁護することができたかもしれません。それができれば、彼らのキスにも少しは気がはれたでしょう⁽⁵⁾。

居たたまれない思いでその場を立ち去ったウォルドは、同期のブリュースターとともに看護婦として地域に乗り込むことを計画する。日曜学校を支援していた富豪ベティ・ロエブ（ソロモン・ロエブ夫人）はウォルドから相談を受け、「気でもふれたか、よほどの天才でもなければ思い付かない計画」に思えたという。そして「天才のほうにすべてをかけて」移民地区での看護施設を支援することを決めた。その後、ロエブの娘婿であるジェイコブ・シフも支援に加わり、2年後、ヘンリー・ストリート265番地に家を購入してもらい、そこを拠点として本格的な訪問看護サービスが始まった。これが、のちにヘンリー・ストリート・セツルメントと呼ばれる移民救援施設の始まりである。かつてはクウェーカー教徒の居住地であったその通りは、安アパートが立ち並ぶ移民街に変貌していたからである⁽⁶⁾。

ウォルドを駆り立てた、悲惨を作り出す社会の一員であることの後ろめたさ、相手が同じ人間であり、道徳的に救う価値が認められるとする考え方、社会の無関心、無策への怒り、そして居ても立ってもいられぬ行動への衝動、それらどれもが20世紀初頭に活動した改革者に典型的な発想である。かれらが自らの転機を語る箇所はおどろくほど似通っている。移民の貧困状況に接して改革者としてその後の人生を歩んだ人々で、すぐおもいだされるのは、シカゴでハルハウスという移民救援施設を開き、のちのアメリカの社会福祉行政に先鞭を付けたジェーン・アダムス、貧しい移民女性たちが避妊に

失敗して命を落とすのを目の当たりにして産児制限運動を始めた、これも看護婦であった、マーガレット・サンガー、またこうした移民居住区を写真や記事で世に知らしめることで新しい報道分野を開拓したジェイコブ・リースらであろう。彼らはみな、南北戦争後のアメリカで、大規模な産業改革が進む中、いままでとは異なる社会が出現し、新しい考え方が求められた時期に青春を迎えた世代だった。そして、アダムズは社会福祉学を、サンガーは産児制限運動を、リースは写真と文学を合体させた新しい報道のジャンルをうみだして、この動揺の時期を乗り切った。ウォルドは訪問看護という新しいネットワークを作り出すことで、この未知の世界に臨んだのである。のちに革新主義運動と一括りでよばれた一連の改革は、野放しだった企業の規制、市民の政治参加など、政治や経済面での整備と行政機能の拡大で知られる。しかし、都市の貧困層を占めた移民への対応もその大きな特徴であり改革の特徴を考える上でも重要な意味をもつ。ウォルドたちは改革の最前線で移民たちと向き合ったのである⁽⁷⁾。

拡大する19世紀後半の産業は安価な労働力を必要とし、移民を呼び寄せたものの、やって来たのは、それまでの移民の大半を占めた西欧諸国からではなく、東海岸には、東欧、南欧から、西海岸には中国、日本からの、貧しく、そして宗教もユダヤ教、カトリック教、ギリシャ正教など多様で、慣習が異なる人々であった。その数は1880年から1924年に移民法を成立させ実質的に彼らを締め出すまでに、2350万人にのぼった。その八割が上陸したニューヨークは、移民同志が助け合う地域を出現させた。改革者たちが階級差を意識して呼んだ「テネメント」という安アパートが並ぶロアー・イーストサイド地区である⁽⁸⁾。

文化の異なる集団への嫌悪感は、かれらがもたらす病気への恐怖で増大した。なぜなら19世紀末の細菌学の発展が病原菌を特定することを可能にし、予防医学へのうねりが生まれていたからである。かつて「神の怒り」と思われていた病気は19世紀には、汚物の放つ、得たいの知れない「毒気」が原因と考えられるようになっていた。しかし、いまや一刻もはやく病原菌を持つ「犯人」を見つけ、「隔離」しなければならなかった。ことにニューヨーク

ではコッホ研究所帰りのハーマン・ビッグスが保健局の拡充をめざし、力を揮っていた。手足となって働く看護婦がもとめられていた。家庭看護を掲げ家庭の中にまで入り込めた訪問看護婦は、病人を見つけ出すのに、うってつけだった。訪問看護婦の発展を後押ししたのは、このような社会環境であった⁽⁹⁾。たとえば、訪問看護婦の資金を得るためのパンフレットには、キャンディ・ストアの話がよく登場した。看護婦がストアで働く売り子の結核を見抜いたというものだ。「考えてもごらんなさい。結核菌のついたキャンディがどれだけ売られたことでしょう。」とそれは続く⁽¹⁰⁾。

こうした公衆衛生運動の担い手の一人、C・E・A・ウィンズローは、公衆衛生に関わる看護婦がいかに重要か、彼らを「コミュニティ・マザー」と呼んで表現した⁽¹¹⁾。「コミュニティ」という言葉には、社会の変革期にあたって、その崩壊を防ぐ意味が込められていたし、「マザー」とはまさに、家庭から社会へ進出してきた19世紀末の白人アメリカ女性が最大の価値を置いた家庭の象徴を言い当てた表現であった。家庭の延長線上に、コミュニティを守る目的で看護婦が位置づけられて行く風潮が、訪問看護婦職の確立に追い風になっていた⁽¹²⁾。

社会からの要請だけではなく、訪問看護婦、のちの公衆衛生看護婦がどのような受け止め方をされていたかをみるには、当時の看護婦をめぐる状況を知ることも重要である。看護婦になるということは、どのような選択肢を意味したのだろうか。看護婦が、雑役婦か売春婦のようにみなされていた時代、「より良い看護は、教育ある婦人によってなされなければならない。」としたナイチンゲールの看護史における位置は繰り返すまでもないだろう。アメリカ看護史においては、1872年三つの看護学校がナイチンゲールにならって生まれたことを機に近代看護が始まったとされる。その後、病院が整備されるにしたがって看護婦の需要は飛躍的に伸びたが、同時に、短期間のトレーニングで看護婦を養成し、従属的な地位に看護婦を置く流れになっていった。ことに病院付属の看護養成学校でこの傾向が顕著にみられた。看護学校は拡充する病院の管理下にはいり、安く看護婦を確保したい病院の方針に組み込まれていった。こうした病院の方針に異議を申し立てたのが、質の高い

看護教育をめざした、ジョンス・ホプキンス大学の付属看護学校のイザベル・ハンプトン・ロブであった。教育の質の高さを確保する、免許や試験、登録制度への闘いのはじまりだった。その後アデレード・ナッティングらによる大学看護学部設立、ソフィア・パーマーらによる看護雑誌の発刊と専門職化が進んだ⁽¹³⁾。

しかし、看護婦にとって現実の選択肢は、病院看護、付き添い看護、そして訪問看護のどれかであった。なかでも、フィールドとよばれた訪問看護の現場が、いかに当時魅力的であったかは、ロブの薫陶を受け看護学校に関わったラヴィニア・ドックがヘンリー・ストリート訪問看護婦サービスに依って活動したことからも、うかがえる。医師たちがその知識を独占して、看護婦を締め付け始めたことを機に彼女は「マテリア・メディカ」という薬に関する百科事典を執筆した。医師が処方する薬剤の知識を看護婦にも同様に持たせようとするものだった。「わかりません。先生に聞いてください。」と病院看護婦が教育されていくことへの、抵抗であった。性病やバース・コントロールなど当時のタブーにも発言し、労働運動や、参政権運動に関わっていくドックが称えたのはウォルドがつくりだす、自由な、看護婦だけで運営されていた訪問看護婦サービスであった。病院の権威や規則に縛られない、看護婦の世界を確立することができたからである⁽¹⁴⁾。もっとも、ドックのウォルドに宛てたつぎのような手紙を見ると、戦いとられた環境といえなくも無い。

ミス・ウォルドの看護婦たちはカバンに軟膏をいれ、錠剤まで与えることがあるのはとんでもないことだ、とアドラー夫人がボンフィールドさんに話しているようです。巡回看護婦は、かならず医師の厳格な指導のもとで働かなくてはいけないという考えの持ち主なのです。ここの医者たちはアップタウンの医者に言いつけるに違いありません。……私たちの応急処置のカバンさえとりあげようとするでしょう。……万全の注意をするようにしてください⁽¹⁵⁾。

こうしてカバンを守りなが続けられた訪問看護サービスは、のちに「女子大生に開かれたもっとも報われる職場である看護婦」のなかで、「もっとも将来を約束する輝かしい機会を提供する」と言われた⁽¹⁶⁾。

志を同じくするものが集まった集団は、ナースのセツルメントと呼ばれ、他のセツルメントが「女子大学の寮がスラムに引越ししてきたようなもの」と形容されたように、意欲ある看護婦達の集まりだった。改革気運の社会から要請され、新しい教育を受けた若い世代が自ら作りだした拠点であった。集まった彼女たちがお互いに支え合う様子は、女性だけの特殊な集団としてあるいはシスターフッドを生んだ力強い流れとして女性史の頂点のひとつとして称えられてきた。それは極端に白人中産階級の女性たちの現象であったとされる⁽¹⁷⁾。

しかし、ここに同じ志をもって集ったアフリカ系アメリカ人（以下黒人という）看護婦がいたことは、あまり知られていない。訪問看護婦という新しい職場が柔軟な発想と寛容な職場環境を作り出していたことを知るためにも、初期の訪問看護の活動を知るためにもここで彼女たちに目を向けてみよう。

黒人看護婦たち

ヘンリー・ストリート265番地は、たしかに活動の中心であったが、もっとも必要とされている人々のところに居ることがウォルドのセツルメント設立の動機であったならば、あとから加わった看護婦たちも、それぞれ自分がもっとも必要とされているところに住むことを選んだ。自らのエスニック・バックグラウンドを選んだのである。たとえばミス・ジョンソンとミス・フォーブスはイースト・サイドのドイツ系が多く住むところに、ミス・シモンズはウエスト・サイドのイタリア系地区に、ミセス・ラリアはヘンリー・ストリートのイタリア系地区に暮らし、自らの活動の拠点にした。そしてニューヨークにおけるアフリカ系地区の最初の訪問看護サービスがヘンリー・ストリートの送りだしたふたりの黒人看護婦によって1906年に始まった⁽¹⁸⁾。

サンワンヒル（コロンバス・ヒル）とよばれた地区は、南部からの黒人に加え、西インド諸島からの移民黒人、そしてアイルランド系が混在する地区で、争いやいざこざの絶えない地区であった。黒人看護婦は白人地区を避けて、黒人地区にしか送り出さなかったと、批判される⁽¹⁹⁾が、ふたつの点を考慮しなくてはならない。まず、それがこの黒人地区での訪問看護婦サービスを支援したエドワード・ハーケスとその妹、シャーロット・スティルマンの方針であったこと、そしてふたりの黒人看護婦自身が黒人地区での活動を望んだことである。のちにスティルマン・ハウス（その後リンカーン・ハウス－202ウエスト63丁目）とよばれるその拠点を、「ロアー・イーストサイドにおけるヘンリー・ストリート・セツルメントのように看護サービスのみならず、愛隣施設にまで成長させたい、」というのが二人の黒人看護婦の望みだった⁽²⁰⁾。

この試みが可能になったのは、ハーケスとスティルマンが亡き黒人ナニーの思い出にとウォルドに資金援助を申し出たことに始まる。ウォルドは慈善協会のスタッフであった黒人看護婦ジェシー・スリートに人選を一任した。このスリートは、黒人看護婦のパイオニアで、当時、ニューヨークの黒人地区を半年かけて調査していた。慈善協会の結核予防委員会に提出されたスリエートの報告書「黒人と結核—1904－1905」は、サンワンヒル地区で展開される、ヘンリー・ストリエートの訪問看護活動に間違いなく影響をあたえている。一步、一步、地区を歩き病人を探し出す努力が受け継がれているからである。ウォルドの依頼をうけた、スリートは同窓のエリザベス・タイラーを推薦した。黒人看護婦に焦点をあてると、訪問看護婦が白人中産階級の女性のみならず、黒人女性にとっても自由と行動力、リーダーシップを発揮できる数少ない機会を提供していたことがわかる。スリートは慈善協会に雇われていたものの、採用条件はきわめて厳しく、正式な採用ではなかった。それに比べて、訪問看護サービスは看護婦資格を優先させた⁽²¹⁾。

タイラーは1894年、ワシントン D. C. の解放黒人病院看護学校に入学した。のちに黒人大学として重要な位置を占めるハワード大学に合併される解放黒人病院看護学校は、北部白人の慈善事業のひとつとして生まれ、解放後

の黒人の自助努力を養成する目的で作られた。白人側からの蔑視は避けられないものがあつた。たとえば、看護教育に当てられた時間が極端に少なく、すぐ実習の名のもとに病院に送られたからである。第一、学校への入学も予行期間が設けられ、指導者のもとで不定期に働かなければならなかった。勤勉と判断されたものだけが、3ヶ月の仮入学者となり、読み書き、算数の学習が許され、そこで看護への適性があるとされたものが、やっと入学できたのだった。しかし、集まった学生の意志の強さは、当初、18ヶ月のトレーニング期間だったが、途中で24ヶ月に変更になったときも、全員が長期の訓練を望んだことにあらわれている。1896年、タイラーは他の16人とともに卒業した⁽²²⁾。

しかし、仕事がなかった。付き添い看護婦を頼むほど裕福な黒人層が多くはなかったからである。ワシントン D. C. の近郊でも見つからず、とうとうマサチューセッツ州のスミス大学の学校看護婦の募集に応じた。しかし、白人相手の仕事に希望が持てず、アラバマやバージニアの大学所属の看護婦として衛生教育を教える機会を求めて転々とした。彼女の向上心はより高度な教育の機会を求めてやまず、ニューヨークのリンカーン看護学校に卒業生を対象にしたコースが出来るやいなや、入学を決めた。しかし、高度な知識を得ても認められる場所がなかった。そんな折り、訪問看護婦の仕事を受けたのだった。ここから彼女のオーガナイザーとしての力量が発揮されていくのである⁽²³⁾。

とは言っても、最初、患者の方からはやってこなかった。建物の掃除夫と友人になって、どこで病人が寝ているのか、建物の中を自由に歩かせてもらったりした。スリートが患者を捜し歩いたように、医師や教会を訪ねては、咳をする人を追いかけたかもしれない。しかし、3ヶ月後には、忙しくて二人目の看護婦が必要であるとウォルドに伝えるまでになっていた。そこで送られたのが、エディス・M・カーターである⁽²⁴⁾。

ニューヨークのニューロッシェル出身のカーターは、タイラーと同じ解放黒人病院学校を1898年に卒業している。北部の田舎町から遠くはなれたところへ、看護婦を夢見ての入学は、家庭での母親の看護体験があつたからとも

想像できるが、当時としてはよほどの意欲があつてのことだろう。卒業後、ニューロッシェルに戻り、付き添い看護婦として働いていたが、ウォルドのこと、ヘンリー・ストリート訪問看護サービスのこと、黒人看護婦を雇っていることを聞き及んで、インタビューに応募し、雇われたのだった。かねてから、スリートの報告を知り、黒人地区における結核罹患率の高さを憂えていたウォルドは、このふたりに大役を託した⁽²⁵⁾。

かれらがいかに精力的に働いたか、当時の訪問看護の実態を知る手掛かりにカーターの報告書から引用しよう。

ジェシー・N……のお世話を続けていますが、ヴァンダービルト診療所にはとても感謝しています。このお気の毒な女性には三才と、一八ヶ月の二人の子がいます。三ヶ月の赤ん坊がいましたが生まれてから体重がまったく増えず、十月に亡くなりました。夫がたよりにならず、家にいないので、彼女の母親が家計を支えています。一ドルでも余分な稼ぎがあると医者たちに往診をたのむのですが、この前、医者は6ドルなければもう来るなといったそうです。……はじめの医者は子宮ガンと結核の診断でしたが、喀痰の検査結果は陰性とあとでいっていました。……二人目の医者が、患者にヴァンダービルト診療所の医者にかかるようにすすめたが、患者は以前入院していたベルビュー病院のようかと、恐ろしがっていきません。そこから島に送られるなら家のほうがいいといいます⁽²⁶⁾。

ここで島とは、ワード島のことで結核隔離病院があるのだった。移民たちからは、ここへ送られることは「死」を意味するほどおそれられていた。前述のラヴィニア・ドックが、手遅れの患者ばかりを送る病院の姿勢をかねてから批判し、その貧しい施設の改善を要求していた、隔離島のひとつである。また、この報告から、病院がいかに移民たちに恐れられていたか、いい加減な医者が多かったか、また診療所の果たしていた役割も垣間みられるだろう⁽²⁷⁾。カーターによると、この後ジェシーを説得して、診療所の治療を

受けさせた。また診療所のソーシャル・サービス部門にかけあい、医療費、シーツ、食料品の無料配布を受けることに成功、驚いたことにジェシーは完治にむかうのだった。1916年11月の報告書はこのほかにも185回の訪問看護、51回の代用訪問、26回のカウンセリング訪問、8回のソーシャル・サービス訪問を伝えている⁽²⁸⁾。

これらの報告は訪問看護がめざした看護を最もよく伝えているだろう。医者に見放された患者に接して、最善を尽くす。家庭に入り込むことでしか得られない情報で患者をささえる。医者、診療所、病院の間にたって患者の不信感を取り除き、もっとも必要な処置をめざす。家族まるがかえで患者の社会復帰をささえる看護の姿である。

カーターの看護がその理念をあらわすのなら、タイラーの活動も訪問看護がめざしていた実践をあらわすものだ。訪問看護サービスの拡大と協力のネットワーク作りである。ウォルドは、タイラーに限らず多くの看護婦をヘンリー・ストリート・セツルメントでの体験の後、手腕が振るえ、教育効果を高められる外部の組織へと送り出した。タイラーもスティルマン・ハウスの活動が軌道にのると、フィラデルフィアのヘンリー・フィップス研究所に移った。そこは、黒人結核患者を専門に治療する施設であった。市の中心部にありながら、その立地が充分いかされていたとはいいがたく、タイラーはスティルマン・ハウスの経験を生かして、積極的に患者のリクルートを始めた。患者の数は100人から3000人に一挙に増えたという。どれほど彼女が地域で信頼されたかがわせるものだ。その後、デラウェアの保険協会、ニュージャージーの結核協会の仕事など各地を巡って結核と闘うネットワークと黒人コミュニティの結核教育につとめたのだった⁽²⁹⁾。

ヘンリー・ストリート訪問看護サービスはその後黒人看護婦を、白人看護婦と同等の賃金で雇っている。1925年には、18人に増え、2人の黒人スーパーバイザーをかかえた。150人いた白人看護婦に比較して、少数だという批難もあろう。確かに白人支援者を失わないようにと、表立った対決を常に避けたウォルドだったが、黒人看護婦に同等の賃金を与えることを訴え続けたことは、現場での共通体験と資格への信頼から生まれた結果だろう⁽³⁰⁾。

ところで、タイラーが奔走した結核協会に代表される、結核対策は、初期の訪問看護サービスのなかでも重要な部門であった。ヘンリー・ストリート訪問看護サービス以外にも、訪問看護を掲げた看護サービス団体が増えるなかで、1909年の調査では、結核協会が約8%を占めている⁽³¹⁾。結核専門の看護婦は、「結核看護婦」と呼ばれたが、そのマニュアル本を見ると、かれらは自らをインスペクターと呼び、もっとも安く、患者を探し出す自らの専門能力を強調していた。すぐさま病院に隔離することを最善とし、独自の判断を下せる結核看護婦の位置を強調していて、家庭看護へのおもいやりはみられない。看護婦を防疫の最前線に位置づけている⁽³²⁾。しかし、現実の仕事は、痰壺の購入に奔走し、洗浄と消毒に追われ、残された家族をおもいやり、患者に付き添って、病院やサナトリウムへ出かけ、迎えに行く毎日で、報告書のひとつ、ひとつはその詳細さに驚かされるとともに、「インスペクター」というスローガンとのギャップをみせている⁽³³⁾。

1909年の調査において、訪問看護婦をかかえる団体の筆頭は訪問看護サービスの21.4%、次に保健局が17.5%、病院が10.6%、先にのべた結核協会が8.1%、続いて、慈善団体の6.5%が続いている。1900年と比較して、訪問看護婦を雇う教会、慈善団体の比率が下がり、保健局や企業に雇われる比率が伸びている⁽³⁴⁾。設立当初、ヘンリー・ストリート訪問看護サービスも、ロエブやシフ、スティルマン家等の寄付で賄われてきた部分が多い。訪問看護婦を支えた、個人の寄付がどのような形で支払われたかという点、「看護婦費用の1年間前払い」が寄付金の単位となっていたのである。自立と行動の象徴であった看護カバンでさえ、看護婦自身が支援者のところに取りに行くこともしばしばであった。支援者は自分が援助する看護婦の名前と顔を確認して、カバンを手渡し、看護婦はそれを恭しく受け取らねばならないのであった。前述のタイラーとカーターもスティルマン家へ、カバンを貰いに出かけている。本来あらゆる慈善団体、病院、診療所から独立して運営することがウォルドの夢であった。そうすることで看護婦たちは自由であったし、また移民の多様なバックグラウンドに、平等に対応することができると誇ってきたのであった⁽³⁵⁾。しかし、それはつねに資金難との闘いであった。そ

して、患者には施しを嫌い、患者の精神的な負担が少ないことをのぞんだ。その証拠に患者自身から支払われた額は予想よりはるかにおおきいことに驚かされるだろう⁽³⁶⁾。しかし、財政の問題は常に訪問看護サービスを悩ませ続けた。それは地域住民の健康をだれが担うかという問題の核心と結びついていたのである。

保健局、教育委員会との連携、民間の保険会社との提携を通しての訪問看護婦サービスの展開、公衆衛生看護婦協会の成立に関しては次号につづく。

注

- (1) Mary Magoun Brown. "Nurses' Settlement Bag." *The American Journal of Nursing*, Vol. I July 1901, p. 772.
- (2) 看護婦の専門職化が医師の階層構造の中に組み込まれていく過程を描いたなかで唯一訪問看護婦がオートノミーをもっていたとして一章をさいしたのは Barbara Melosh. *The Physician's Hand: Work, Culture, and Conflict in American Nursing*. Philadelphia: Temple University Press, 1982. 看護史のなかでは傍流とされる訪問看護婦に焦点をあてた Karen Buhler-Wilkerson. "False Dawn: The Rise and Decline of Public Health Nursing, 1900-1930." In Ellen Condliffe Lagemann ed., *Nursing History: New Perspectives, New Possibilities*. New York: Teachers College Press, 1981, pp.89-106. は、1920年代をそのピークとみて、「実用的で象徴的」役割を終えたとしている。看護史全般にいえることだが、専門職化のリーダーシップにあてられた比重が大きく、患者の視点にたった看護史への課題が残る。同時に看護の対象となった移民の二世が医師や看護師に成長していく過程も言及されなければならないだろう。また、本論でとりあげた看護は病院内に留まらず、「市民教育」、「国民の健康」という国家的な発想をはじめとしており、そうした点での研究も課題である。なぜなら、アメリカの発展とともに看護婦たちの国際協力のネットワーク作りに

発展していくからである。なお本論では、訪問看護婦サービスの特質を理解する枠組みとして、Benedict Anderson. *Imagined Communities: Reflection on the Origin and Spread of Nationalism*. New York: Verso, 1991. 地域社会に根付いた集団こそ国家の枠組みを超えられる点を指摘した Michael Peter Smith. *Transnational Urbanism: Locating Globalization*. Malden: Blackwell Publishers Inc, 2001. を参考にしている。具体例としてヘンリー・ストリート訪問看護サービスを拠点に国際看護連盟の発足と発展に尽くしたラヴィニア・ドックに関しては、拙稿“Lavinia Lloyd Dock: Nurse and Internationalist” in『人文学部紀要』14号, 恵泉女学園大学, 2002年, 1月。

- (3) Annie M. Brainard. *The Evolution of Public Health Nursing*. Philadelphia and London: W. B. Saunders Co. 1922. 訪問看護婦自身による初期の通史。
- (4) Lillian Wald. *The House on Henry Street*. (1915) New York: Dover, 1971. は *Windows on Henry Street* (1934) Little, Brown Co. とともにウォルドの残した自伝的ヘンリー・ストリート・セツルメントの記録。自伝というよりは支援者を意識した活動報告史, 共同体験記録であり, 「私」と「私たち」が混在して語られる。またウォルドには決定的な個人の伝記が存在しない。そのことこそウォルドの活動の作り出した共同体的看護婦集団の特徴をあらわしているだろう。女性の自伝を考えるうえで示唆に富むのは, Susan Stanford Friedman. “Women’s Autobiographical Selves: Theory and Practice”, in Shari Benstock. *The Private Self: Theory and Practice of Women’s Autobiographical Writings*. Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1988. 訪問看護サービスの歴史は, 拙稿 “Lillian D. Wald and Visiting Nursing” *The American Review* 17. The Japanese Association for American Studies. 1983. また1993には Ellen Paul Denker ed. *Healing At Home: Visiting Nursing Service of New York, 1893–1993*. New York: Visiting Nurse Service of New York, 1993. がセ

ツルメントの100周年を記念して出版された。かならずカバンを携えた訪問看護婦の写真集が印象的である。

- (5) Wald, *The House on Henry Street*, p.6. Lillian Wald. "The Nurses' Settlement in New York." *The American Journal of Nursing*. Vol. II May, 1902, pp. 567-573. 転機を語るこの箇所は繰り返して語られることが多かった。
- (6) *Healing At Home*, p. 9. なお、ブリュースターは健康上の理由からまもなく退いた。
- (7) 革新主義時代を近代化に伴う専門職化という点から分析したものに、Robert H. Wiebe. *The Search for Order, 1877-1920*. New York: Hill & Wang, 1967. がある。セツルメント研究に先鞭をつけ初期の運動に詳しいのは Allan F. Davis. *Spearhead for Reform: The Social Settlement and the Progressive Movement, 1890-1914*. New York: Oxford University Press, 1967. また移民との出会いがその革新主義政策を理解する上で欠かせないとし、セオドア・ルーズヴェルトに焦点をあてたものに、Gary Gerstle. *American Crucible: Race and Nation in the Twentieth Century*. Princeton: Princeton University Press, 2001. それぞれの自伝的著作は、Jane Addams. *Twenty Years at Hull House*. (1910) New York: Macmillan, 1960. Margaret Sanger. *An Autobiography*. (1938) New York: Dover Publications, Inc. 1971. Jacob Riis. *How the Other Half Lives: Studies among the Tenements of New York 1890*. New York: Hill & Wang, 1957. またリースをはじめ暴露記事屋と揶揄されたマックレーカーに焦点をあてこの時期の青年像を生み出した背景を分析してすぐれたものに、Ellen F. Fitzpatrick. "Late-Nineteenth-Century America and the Origins of Muckraking", in *Muckraking: Three Landmark Articles*. Boston: St. Martin's Press, 1994. がある。
- (8) 移民関連の著作は枚挙にいとまがないが、代表的なものに、Moses Rischin. *The Promised City: New York's Jews, 1870-1914*. New

York : Harper & Row, 1970. John Bodnar. *The Transplanted : A History of Immigrants In Urban America*. Bloomington : Indiana University Press, 1985. Elizabeth Ewen. *Immigrant Women In the Land of Dollars : Life and Culture of the Lower East Side 1890-1925*. New York : Monthly Review Press, 1985. Mario Maffi. *Gateway to the Promised Land : Ethnic Cultures in New York's Lower East Side*. New York : New York University Press, 1995.

- (9) 公衆衛生の概念が南北戦争の体験を境に急速に発展したこと、また、臭気が病気の原因と考えられていたことから、汚水処理等に活動が集中していた初期の公衆衛生運動が、細菌学の発展を受け予防の観点へと転換し発展する歴史をおったものに John Duffy. *The Sanitarians : A History of American Public Health*. Urbana : University of Illinois Press, 1990. Suellen Hoy. *Chasing Dirt : The American Pursuit of Cleanliness*. New York : Oxford University Press, 1995. 椎名美智訳『清潔文化の誕生』紀伊国屋書店1999。アメリカでの細菌学の発展が、大量移民の流入と時期が重なったため、移民への恐怖と公衆衛生運動の関連を追究したものに、Alan M. Kraut. *Silent Travelers : Germs, Genes and "Immigrant Menace."* Baltimore : The Johns Hopkins University Press, 1994.
- (10) Buhler-Wilkerson, "False Dawn," p. 90.
- (11) *Healing At Home*, p. 11. C. E. A. Winslow, "The Training of Nurses for Public Health Inspection," *Public Health Nurse Quarterly*. Vol. V. April 1913, pp. 43-49.
- (12) Sheila Rothman. *Woman's Proper Place : A History of Changing Ideals and Practices, 1870-to the Present*. New York : Basic Books, 1978. は「Educated Motherhood」とかれらの理想を呼び、当時の女性活動家をまとめている。
- (13) Janet Wilson James. "Isabel Hampton and the Professionalization of Nursing in the 1890's." In *The Therapeutic Revolution : Essays*

- in the Social History of American Medicine*, ed. Morris Vogel and Charles E. Rosenberg. Philadelphia : University of Pennsylvania Press, 1979. pp. 201–244. は、ハンプトン・ロブが若くして事故死したため、活動の期間が短く注目度が低いが、看護婦の専門職化に先鞭をつけた人物として高く評価している。Susan M. Reverby. *Ordered to Care: The Dilemma of American Nursing, 1850–1945*. New York : Cambridge University Press. 1987. はアメリカ看護史を理解する上でもっとも影響の大きかった著作のひとつ。「ケア」を評価しない社会で「ケア」を重視し専門職化しようとしてきた看護婦像を描き出した。ただし、「ケア」を支える母性主義の強調に疑問が残る。その点を指摘したものに、Tom Olson. “Ordered to Care ? Professionalization, Gender and the Language of Training, 1915–37” in Anne Marie Rafferty, Jane Robinson and Ruth Elkan Eds. *Nursing History: Politics of Welfare*. London : Routledge, 1997, pp. 150–163. 1997. 徹底して技能面の訓練を強調した記録を紹介し、看護婦が母性の強調で地位を確立してきたとする見方に疑問を投げかけている。
- (14) Lavinia L. Dock. “Self-Portrait,” *Nursing Outlook*. Vol. 25. January 1977, pp. 22–26.
- (15) Dock to Wald, June 30, 1904, Lillian Wald Papers, Columbia University.
- (16) Edna L. Foley. “Nursing As a Vocation for the College Woman”, *Nurses’ Journal of the Pacific Coast* Vol. VIII Feb. 1912, pp. 54–63. フォーリーはシカゴ訪問看護婦サービスの中心的看護婦、のちに公衆衛生看護協会の会長を務める。
- (17) Rothman. Allan F. Davis. *American Heroine: The Life and Legend of Jane Addams*. New York : Oxford University Press. 1973. Sara M. Evans. *Born for Liberty: A History of Women in America*. New York : Free Press. 小檜山ルイ，竹俣初美，矢口祐人訳『アメリカの女性の歴史—自由のために生まれて』明石書店1997。Anne Firor

- Scott. *Natural Allies : Women's Associations in American History*. Urbana : University of Illinois Press, 1993. John P. Rousmaniere. "Cultural Hybrid in the Slums : The College Woman and the Settlement House, 1889-1894", in *History of Women in the United States : Historical Articles on Women's Lives and Activities* Vol. 17. *Social and Moral Reform* Part 1. Nancy F. Cott Ed. Munich, New Providence, London and Paris : K. G. Saur, 1994, pp.280-301. ヘンリー・ストリート・セツルメントに関してその女性集団としての特徴を分析したものに, Doris Daniels. *Always a Sister : The Feminism of Lillian D. Wald*. New York : The Feminist Press at the City University of New York. 1989. Diane Hamilton. "Constructing the Mind of Nursing" in *Nursing History Review* 1994 vol. 2. pp.3-28. また, アメリカにおける看護史をフェミニズムの観点から分析したものに, Joan I. Roberts and Thetis M. Group. *Feminism and Nursing : A Historical. Perspective on Power, Status, and Political Activism in the Nursing Profession*. Westport : Praeger Publishers, 1995.
- (18) 人種, 民族別による看護婦の派遣については, Jane Elizabeth Hitchcock. "Method of Nursing in the Nurses' Settlement, New York City." *The American Journal of Nursing*, 1907, p. 461. "Nurses' Settlement News." *The American Journal of Nursing* Vol. VI Sep. 1906, p. 832. Mary Elizabeth Carnegie and Josephine A. Dolan. *The Path We Trend : Blacks In Nursing, 1854-1984*. Philadelphia : J. B. Lippincott Co., 1986, pp. 148-149.
- (19) Darlene Clark Hine. *Black Women In White : Racial Conflict and Cooperation in the Nursing Profession, 1890-1950*. Bloomington : Indiana University Press, 1989, p. 101. この著作は, 欠落していた黒人看護史を補ったという点より, 地域と看護婦をむすびつけ, 患者側からのニードと看護のあり方に視点を変えたところにもっとも意義がある。

- (20) Adah B. Thoms, *Pathfinders : A History of the Progress of Colored Graduate Nurses* (1929) New York : K ay Print House, 1985, p. 41.
- (21) Jessie Sleet. "Tuberculosis among Negroes : A Report to the Committee on the Prevention of Tuberculosis 1904-1905." In Third Annual Report of the Committee on the Prevention of Tuberculosis of the Charity Organization of the City of New York. スリートの報告は "A Successful Experiment" *American Journal of Nursing*. 1901 No. 10. pp. 729-31の中で全文が引用され, その活躍がたたえられている。Joyce Ann Elmore. "Black Nurses : Their Service and Their Struggle." *The American Journal of Nursing* Vol. 76. March 1976, p. 436. Mabel Keaton Staupers. *No Time for Prejudice : A Story of the Integration of Negroes in Nursing in the United States*. New York : The Macmillan Co., 1961, p. 7, 8. Carnegie, pp. 146-149. Thoms, p. 40. Marie O. Pitts Mosley. "Satisfied to Carry the Bag : Three Black Community Health Nurses' Contributions to Health Care Reform, 1900-1937." *Nursing History Review* 4 (1996) pp. 65-82.
- (22) Thomas. p. 40. Staupers. pp. 7. 8. Carnegie. pp. 148. 149. Mosley. pp. 69-71.
- (23) *Ibid.*
- (24) Thoms. p. 41. Staupers. p. 8, 9. Carnegie. p. 149.
- (25) Mosley. pp. 75-77.
- (26) Edith M. Carter. "Summary of Stillman for the Month of Nov. 1916." Submitted Dec10, 1916, Visiting Nurse Service of New York Archives. Mosley. p. 77.
- (27) Lavinia L. Dock, "An Experiment in Contagious Nursing." *Charities*. July 4, 1903. 19-23. Howard Markel, *Quarantine ! East European Jewish Immigrants and the New York City Epidemics of 1892*. Baltimore : The Johns Hopkins University Press, 1977. とともに,

隔離島として使われたマンハッタン島周辺の島々の惨状を伝えている。Charles E. Rosenberg. *The Case of Strangers: The Rise of American Hospital System*. New York: Basic Books, 1987. Charles E. Rosenberg. *Explaining Epidemics and Other Studies in the History of Medicine*. Cambridge University Press, 1992. Chapter 8 は病院が整うまでの診療所の果たした役割にくわしい。

(28) Carter, *Ibid.* Thoms, p. 44.

(29) Thoms. pp. 42-44.

(30) *Healing at Home*, p.15. ウォルドの苦しい立場をしめす例は、ニューヨークのベルビュー病院付属看護学校への進学を望む黒人学生を、看護学校の混乱を理由にあきらめさせたことにも見られるだろう。「黒人の看護学校も優れており、その卒業生は有能である。」とし、「一人の黒人学生の入学が多く南部からの看護学生を退学に追い込むことだけは避けねばならない。」と主張している。Wald to Noyes, August 13, 1914 Lillian Wald Papers, Columbia University. 一方タイラーから逐一連絡が届く、警察の黒人への差別等の不祥事の解決には惜しみない援助をしている。Wald to Tyler, July 10, 1908. Lillian Wald Papers, Columbia University. またドックはかねてより黒人看護婦擁護で知られ、全米黒人看護婦協会の設立にあたってもその援助で知られる。エドナ・フォーリーもシカゴ訪問看護婦サービスにおいて地域で最初の黒人看護婦を正式採用した。

(31) Karen Buhler-Wilkerson. "Left Carrying the Bag: Experiments in Visiting Nursing, 1877-1909." *Nursing Research* Vol. 26. Jan/Feb 1987, p. 43.

(32) Ellen N. La Motte. *The Tuberculosis Nurse: Her Function and Her Qualifications: A Handbook for Practical Workers in the Tuberculosis Campaign*. New York: G. P. Putnam's Sons, 1915, pp. 117-121, pp. 136-139. この著作は、自己判断を下せる有能な看護婦像を印象づけた点で看護婦の専門職化に貢献したといえる。

- (33) M. Adelaide Nutting, “The Visiting Nurse for Tuberculosis” *Charities and the Commons* XVI April 1906, pp. 51–54.
- (34) Buhler–Wilkerson, “Left Carrying the Bag.” p. 43.
- (35) Wald. *The House on Henry Street*. p. 27. “The Henry Street(Nurses’) Settlement in New York.” *Charities and the Commons*. XVII April 1906, p. 35.
- (36) The Henry Street Settlement, “Report of the Henry Street Settlement, 1893–1913.” Lillian Wald Papers, Columbia University”によると、1909年には\$ 3000.00, 1913年には\$ 5182.32であることをつたえている。